慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	グスタフ・カッセル「経済学根本思想」の一節
Sub Title	
Author	高木, 寿一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.2 (1926. 2) ,p.257(117)- 267(127)
JaLC DOI	10.14991/001.19260201-0117
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260201-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

である。古代は是を過古に求め現代は是を將來に打建てんどす。而して吾人の求むべき世界は ち治り交々相悪めば則ち飢る』ものである。洵に古代より神の王國は吾人の心境を支配したる憧憬 担るかを察するに相変せざるに

起る」、

墨子。 や。法律なくしては吾人は相侵して以て悖亂に歸するものなりや。然れ共『嘗みに亂は何によりて せられざるものであらうか。吾人は猶相互に制することなくしては平和の國土に住せざるものなり **兼愛上第十四)ものにして『故に天下 錠ねて愛すれば則**

adventure full of joy and hope, based upon the impulse to construct than upon the desire to retain thine shall be ours, (William Morris-The Day is Coming) fill it with mental delights (B. Russell Road to Freedom p. 210) ピント Then all mine and all free play, in which love in purged of the instinct for domination, what we possess or siege what is possessed by others. It must be a world in which affections The World that we dispelled by happiness and the unfettered must seek is a world in which the creative spirit is alive, in which life is development of all the instituncts in which cruelty and envy have build up life and

なるべきも、斯る世界は單にそを『創造せんとする人を待つ』のみであらうか。

徳的完成のみを努力する狀態であつて國民間と等しく個人間も平和の支配に置かれ生存競爭は終末 に告ぐるに至らう。人性が如何なる場合に於ても斯の如き理想狀態に達し若しくは斯る道へ眞摯に 進み得るものなりやは茲に論する必要はない。 『洵に高尙なる精神は理想的なる神の國を迎望する、 そは各人が絕高の自己否定の點に到達し道 只人類が未だ斯る狀態に到達すること遙に遠きは之

グスタフ・ カツ Ł パ「經濟學根本思想」の一節

高 木

むる所なり。 問題に關し從來發表せる論文著書は殆ど枚擧に遑なく,經濟學界一方の雄たること夙に世人の認 スト 水 ム大學教授グスタフ・カッセル氏が貨幣。 金融、外國爲替の問題或は理論經濟學の

之がために著はされたるものは即ち Fundamental Thoughts in Economics (1925) なり。本書は章を 分つこと四にして も自己の經濟學的諸研究に於て嚮導觀念ミなれる根本思想を說明するの責任あるを感せられたり。 本思想を著者自らによりて数示せらるるとは多大の便益となるものなり。茲にカッセル教授自ら カッセル教授の如き多數の著作を有する學者の勞作に接する者にとりては、之等の諸篇を通ずる

I. Aims and Methods of Economic Theory.

Chapter II. Economics as a Theory of Price

Chapter III. The Principle of Scarcity and the Conception of Cost.

Chapter IV. The Scarcity Theory of Money.

第二十卷 二五七

ける所説の主旨を述べて本書の一斑を紹介するに止めんこするものなり。 本文にありては、本書にありても殊に基本的部分をなせる、第一章「經濟理論の目的と研究法」に於 兹に本書所説の全班を示すことは未だ卒讀の際、 到底之を許さどるものあり。以下

単なる敍述をなさんとするものなり。 と論理的統一とを有するを見るべし。 問題に於て經濟的觀察點より見て本質的なるものに常に注意を傾倒せんか、其結果は自然的結合性 ること多し。之等の必然性を發見することこそ重要なり。 ここを發見すべし。實に經濟生活に於ては必然なるここ多く。經濟生活分析の方法に於ても必然な 此準則を遵奉せんか、經濟理論に於ては一般に信ぜられたる程に專斷を容るるの餘地なさものなる **き主題の經濟的本質のみによりて決定さるるに努めたるここに因るものなり。若し吾** 稱せられ得べさ一の統一體を成すとせば、そは總べての場合に余の目的と研究方法とが研究さるべ ふに若し余の諸種の研究にして或意味に於て、假令決して完全にあらずとも、經濟學的體系 此主要観察點よりして以下經濟理論の目的及び研究方法の簡 此事を行はんさし、 又吾人が研究すべき 人に して終始

濟生活なり。 て傍觀し唯現實の經濟事實の間接の知識を有し得るに過ぎざる者に比 經濟學が明にするを要する第一の問題は經濟學其自身の存立を論證する事なり。 然らば此經濟生活の渦中にありて日々實際に其問題に與かれる人々は、其圏外に在り 經濟生活をよく知れる 斯學の對象は經

濟學が其獨特の諸職分の明確なる觀察を得んと欲するに當りて、 在り。然らは斯學にして其存在の理由を論證せんミせは、經濟學は實務家によりては関却せらるる は眞に事實たる所にして、經濟生活の科學的觀察と實務的觀察との相異の一層綿密なる分析は、經 而も本質的重要性と必然性とを備ふる所の其獨自の目的を有することに因らざるべからず。こ 斯學其者にどりて極めて有用なる

こさあり。對象は研究の性質に從て決せらるべしと雖も。如何なる場合にありても一の封鎖的經濟 單位は少にしては孤立的農民經濟たることあり、大にしては近世國民の經濟或は全世界の經濟たる 象を擴大し一層大なれごも其自體にて完全なる經濟單位を考察するを要すればなり。 たるべきことを肝要とす。斯る經濟は常に多少の廣袤を有する社會組織にして、 **ゞるべからずと云ふここなり。こは經濟學は常に其分析せんと欲する經濟を其自體封鎖の狀態にあ** ことあり。經濟學にとりて實際に重要なるは、經濟學は原則上常に全經濟單位を以て其對象となさ 其連鎖中の或任意に採れる一環に止まるを得ず。經濟的實在に於て相互に不可分の關係にある諸事 **黎總體を考察せざるべからず。經濟學は經濟生活を全體として考察すべく、實務家個人の見地より** て外界と何等の關係なさものと假定すべしと云ふここを意味す。蓋し何等かの斯る關係存すると 原因結果の連鎖總體の完全なる觀察を得んには、 科學は原因と結果を論ずるに當つて常に其全合成體を其對象とせざるべからず。 (二五九) グスタフ・カツセル「經濟學根本思想」の一節 科學的見地よりせば、關係大なるものと少くごも同一の重要性を有する 其等の關係をも考慮に入れ、 從て經濟學の對象 斯くて採れる 即ち其研究對

予の此問題に關する主著を"The Theory of Social Economy"を称せる所以とす。 に必ず社會的現象なり。 此事を振調せんがために經濟學の對象を「社會經濟」と称するを適當と

るに到るべし、 的形態を考慮せざるべからず。 り、第二にそれの現はるるを常さする貨幣的形態の觀察點よりして二重の敍述を興ふるの必要を見 的有用性の決定的要因たること大なり。 に容易の業にあらず。 學が常に經濟生活の實在 形態を以て滿足する事なり。外部的形態を通じて其背後に横はる現實實在を把捉することを第一に **基目的とすべき社會經濟的研究にとりては實務家の行ふ考察方法は明に不可能なり。されどこは常** せられたる時には全然不可能なるを發見せらるべし。 は全然뽢れ 題の社會經濟的研究方法と私經濟的研究方法との間には質に本質的相異あり。 的意義に於て用ひられたる場合には全く正しき章句も、社會經濟に適用する場合に 質に經濟學者が此業を極め得る其方法如何は彼の研究の科學的價值及び實際 私經濟的見地よりせば全く可能なる事の多くにして、社會經濟全體に擴大 realities の把捉に努むるに反し、實務家は其經濟的判斷に於て多く外部的 其結果多くの場合に於て經濟現象を第一には實質的實在の觀察點よ 勿論經濟學は實際生活に於て經濟的質在の表現さるる貨幣 經濟學が實務經濟的考慮で異る他の點は經濟 其相異の

策に於て特に重さをなせる觀念と異る。實に政治家は單に自家の權力を用よるのみにて自己の政策 經濟學の方法及び觀察點が實務家のものと異るのみならず、根本的諸點につきても亦通常經濟政

殿たる事實、 悉くが獲得され得ると云ふは決して眞にあらず。確定的制限の存し、吾人の意の儘に除去し得ざる の結果を決定すべし。こは吾人の所謂社會經濟の實に本質なり。されざ總べてのもの悉くが生じ、勿論人間の意思は總べての經濟的行爲の方向範圍を決定し、それによりて或程度まで全經濟的進步 必然的關係の存するものあり。

白なる概念を得るの助けどなり得るなり。 右おるるかを研究するは極めて重要なることなり。 妥當性を有するか 存するなり。 依頼するは元より極めて重要なることにして、 せり。此種の概念は總 人の經濟生活の諸種の 全く單純なる政治的權力偏重は廣く社會組織制度の理想的形態に關する思索に於て特に重さをな の想像し得る形態 て以上の諸原則に從ひて終始完全なる社會經濟の研究、貨幣的形態の下に於ける經濟 此業務を行はん 其諸現象及び其諸關係の必然性の程度に關する研究に努むべき社會經濟理論に 方面が如何なる程度まで其社會組織、 べてのユー 社會に於ては如何に現はるべきか等を明瞭にせざるべからす。 果は社會の がためには、 トピア及び革命的企圖の究極の 特殊形態に關係なきか又其程度如何、若し其左右さるるを示さ 經濟理論は其研究の各々に於て其結果が如何なる程度の 斯る理論にして始めて所謂「社會問題」につきて 質に此點に經濟理論の最も重要なる業務の一の 社會制度を離れて存するか或は之に左 出發點をなすを見るべし。從て吾 社會狀態の

經濟理論の之等の目 ご研究法及び諸研究法の撰擇を支配すべき諸原則の問題は一層綿密なる分析を要す。 的は既に吾人に其研究方法に關し貴重なる一般的指針を與ふるものなり。 研究法撰擇

コメニン グスタフ・カツセル「經濟學根本思想」の一節

第二號

の關係外の视察點よりして左右さるること屢しなり。 につきても或必然の要素あり、少くとも從來特に盛んなりし如き全然任意の撰擇を許さいるものあ 如きも 前者 **尙一般に無視せられ、經濟學の多くの重要なる論策が經濟的觀察よりも寧ろ技術的其他** 研究法撰擇に於ては經濟的考慮によりて決定すべして云ふは極めて簡單なる準則たるが

各研究に於て其結論の現實の妥當性如何を示すは經濟學の一の根本的業務なり。 程度まで社會秩序によりて影響を受け又或程度までは此要因の影響を彼らず。此獨立性の程度及び 第一に、 經濟學の採るべき一般方法を見る。經濟學の對象とする一定社會單位 の經濟の本質は

妥當性を有することゝなり、更に假說を設くるに從て更に制限せらるべし。 交換經濟 では社會秩序に關して少しも假説を設けずさせば、吾人は外的條件に關せず如何なる社會經濟にも 必要以上の假定をなさ 原則さすべし。 は總べての價格現象及び價格決定の全行程。は考慮の中に入るべし。從て研究の結果は狹隘なる 更に現代の經濟事情に即せんとせば社會秩序に關し更に特殊の假說を要す。殊に最も重要なる 般的妥當性を有する結論に到達すべし。之等の結論は經濟的必然性の質に真髓を明にすべし。 此目的のために吾人は基本的諸研究に於て常に社會組織社會制度に關し最少限の假說を設 an exchange economyの假定なり。此交換經濟に特有なる新諸現象の全班、 然らば吾人の結論は其事實有する全幅の妥當性を示すべし。經濟的研究の當 研究結果の妥當性を必要以上に制限し其結果眞理の一班殊に 當該研究の本質に關し 殊に先づ第一 初に くる

ても極めて重要なるものなり。 此準則の選奉により、 る社會經濟 研究は重要なる經濟現象の眞相を深く究むるの手段となるを以て科學其者にとり 經濟狀態は任意の社會秩序改革と如何なる程度まで關係ならかを示すと共

理論的解剖は現代實際の經濟の現實の諸問題を明にするに有益なる手段となるべきを以てなり。さ **變化を被るかにつき考察することは時に有用なり。斯る研究は社會主義者の獨斷的信念の根據なき** ことを示すと 現代經濟生活の或特徴は假設的純社會主義社會に於ては如何に現はるべきか、其現象は如何なる ご經濟は本質に於て社會的行程なるを以て所謂「クルー はざるなり 假定的社會主義社會は交換經濟の理論上最簡單なる形態と看做さるべく、 現代社會經濟の本質的方面の了解を易からしむるに適せり。 ソー經濟學」に就ては到底同一の言はなし 斯る假設的經濟の 蓋し或點より見

二階段に於て、靜的形態に於て取扱ひ得るが如き動的狀態を設く、即ち「劃一發展的經濟」" Uniformly 性より生するなり。然らば抽象より具體に移る各階段は旣に經濟理論に對して定まれるものあり。 ら決定せらる。經濟生活を錯離ならしむる主なる且つ最も一般的のものは經濟生活の間斷なき可變 べきなり。研究進路は任意に撰ぶべきものにあらずして、考察さるる實在の根本的性質によりて專 第一階段に於て吾人は全く可變性を除外し、 其對象に關しては、經濟學は最簡單、從て最も抽象的なる事質より一層複雜、具體的の事質に及 Economy。を研究すべし。 之を準静的階段とも稱 從て純「静的經濟」を以て吾人の研究の對象となす。第 し得べし。 第三階段に到つて正に「經 3:

第二十卷 (二六三) グスタフ・カツセル「經濟學根本思想」の一節

二號 二三三

濟動學」と称すべきものを研究することしなる。

納法の助けありてのみ始めて可能なること明なり。 説は抽象的にして、現實世界に於ては斯る階段の觀察すべきものなければなり。 や吾人は既に研究せる劃 第一、第二階段に於ては明かに純演繹法を必要とす。 此經過は經濟學對象の本質の論理的結果にして其各階段に於て異れる研究方法を用ふるを要す。 的發展に照して實際生活が示す錯行を研究し、 蓋し之等の階段に於て吾人が出發點とする假 其原因を明にするは唯歸 されざ動學に到る

研究するに絶對に必要欠くべからざるを直ちに明にすべし。 つきては明なり。 比較の標準でして必要なり。 特徴の明確なる概念を與へい **静的經濟及び劃一發展的經濟の假說は其者の中に必然の要素を有するものなり。** 他に一般單純化の假説を設くるは其必要なく且つ又本質的に誤れることあり 割一發展的經濟研究は發展的經濟の觀念を能ふ限り單純化し、又經濟生活の本質 之によりて何故劃一的發展の研究が更に進んで總べての動的經濟を 更に純動的狀態の研究のためには實際經濟狀態に於て生ずる變動さ 茲に示されたる諸假説を以て充分にし こは静的經濟に

て中 は「永續的」經濟、殊に永續的生産行程を其對象でせざるべからず、此觀察は經濟理論の最も重要にし 經濟生活の一の本質的特徴は經濟生活の常に繼續し、從て始、終を知らざる事なり。 心をなす諸問題の概念に對すると同時に之等の問題研究のために採らるべき方法に對しても決 るも のなり。 VT系書的考察に從るものにあらう。新ら研究に對して以程序生活の最本質或財貨の生産を始めより終まで檢するのみなる舊研究法は技術的考察に從 其結果經濟學

的特徴の多くは根本に於て了解不可能なり。

の業務の一時的性質を備へざるを以てなり。 して云ふ一般原則の結果たるにすぎず。蓋し社會繼濟は繼續的存在を有し、 質に繼續的經濟を研究せざるべからざるは、 吾人が常に完全なる社會經濟を研究の主題となすべ 其圏内に行はるる各個

到って同じく の新概念の生じ且つ絕對的不變の現象として研究され得べき劃一的發展の繼續的經濟に及び、 念を最も簡單に定義する最善の機會を有する繼續的靜止的經濟より進んで、 云ふ原則でを結合せば全研究の決定に達し、 性を有するかを明かならしめたりと信す。 課する要求を意識 之等の諸研究原則で、 經濟理論研究方法を經濟生活其者の本質的諸要素並に之等の要素が必然經濟理論研究法に 繼續的經濟を研究するも其動的狀態を研究することゝなる。斯くて吾人は簡單に以上 し嚴密に遵奉して研究法を撰定することが、經濟理論にとりて如何に根本的 前述の静的 内階段より 總べてのものが不變にして從て經濟理論の最根本的概 劃一的發展の準靜的階段に、最後に動的階段に進むと 殊に貯蓄及び資本蓄積 玆に 更更

きても數量的概念を得ることに努めざるべからず。從來經濟學は論せらるる諸觀念の數量的決定を も現實の數字の上に立つることに努めざるべからす。概數或は假設的數字さへも全く無きには優る 經濟學は本質的に數量に關す。 ために重大なる損害を蒙れり。漠然たる語句を以て觀念を示して滿足する者極めて多けれ 科學的研究法にあらず。 從て吾人は經濟生活に於て吾人の注意するに足る如何なる事に 吾人は能ふ限り經濟的推 理を假令極めて概數たりと 2

三十卷. (二六五) グスタフ・カツセル「經濟學根本思想」の一節

研究方 するによりて始めて何等かの明確なる結果に導き得るなり。 に所謂貨幣數量説、 人は決して極め に照して考察し得る事によりて、 すべき結果に達すること多く望むべからず。 にするに必要なるを以て なり の原因の效果の量 の原因が或一定の結果に責任あり、之等の原因の記述を要するが如き場合に見るべし。 よりて本質的要因と非本質的要因との區別をなし得ざるに於て重大なる誤謬を生じ易く又尊重 なり。蓋し吾人が全然誤れる結論を引くを防ぎ、考慮すべき諸種の要因の も多くの場 然る後、 法は決定的重要性を有す。斯る研究は常に旣述の如く、 其後の研究に明確なる結構を與ふ。吾人が其以上に進み得ざることもなさにはあらざれご て漠然たる形容句を以てする質的推理を以て滿足し得ず、量的研究法を嚴密に適用 現實の發展運動を正常曲線よりの歪みミして測定し得るなり。 合に於て、 共同 利子理論、 の效果を總結果より減ずれば、 的概念を明にし得るに於て始めて可能となるなり。 なり。 其後の研究は斯る研究範圍の制限と、 外國爲替理論等に於て見るべし。 經濟學に於て至要なるは量的諸關係にして、 極めて著しく促進せらる。斯る量的研 經濟學に於ける量的考察の有用なるを示す好例は屢く 明にされざる所は少なる範圍にすぎざること 先づ劃一的發展を表はす正常曲線を 總べての動的狀態研究に於て量的 未知の小要因が既知の本質的要因 究法の有用なることは、殊 先づ最も本質的の諸原則 若し吾人にして量的規 斯る問題に於ては吾 相對的重要性を明か 此事は、

€ 最後に經濟學に於て「定義」を設く 青に豆満早は色な及び梅語のる方法を見る。 此方面に於て 電光に 専断的方法、 非經濟的觀

に導 検討に始 濟生活の本質的質在によりて決せらるべしで云ふ原則を堅く邀奉するにあり。 離滅裂の狀態に惱みつ 適合する 一純化を 到る べき物其ものが明に理解さるるに先立ちて名称を與ふべからず。故に第一の業務は經濟生活の諸 入せらるべきに 諸關係に於ける本質的なるものの分析にあり。 べきこと既に めざる 行ふによる 區別を立 べからず。 あらず。 長き經驗の示す所なり。 つるを得て、 の外なし。 \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ 吾人がそれ 然らば、 此悲む 且つ定義を用ふるの時に達するなり。 をなし得るは唯 此概念に與へらるる範圍並に意義につき全然専斷の行 べき狀態を打開する唯一の途は、 吾人は先づ資本概念の導入を必要とする經濟的 之にして明なるに到つて始めて、 静止 的經濟と劃一發展的經濟の二種の 經濟學 令 の區別並に定義は經 資本の概念は先験的 人は決して其名を有 經濟的本質 根本的 質在の はるる

こごを犠 て表は 性に 3 を雖も、 な ₹* 4 質 得る所に 3 を以て、 人の間 際科學の用語 も經濟學獨自 はあらず 12 經濟學は實業界並に世人一般の用語で可及的密接の關係を保つに努む 行はるゝ漠然不定の經濟的 が實際生活 の標識を用ひ又經濟學の諸名辭に一層明確なる意義を與ふる の用語に能 観念は、 ふ限り よく合致すべきは元よ 屢~ 誤謬と矛盾とを含む漠然不定 り望ましきこ

以上 の目 7 12 12 は 於 研 7 方法は 以 理論の目 W) 經 所 説に基きて重要諸問題を研究せる主なる結果を提示せんとする濟理論重要問題の研究に極めて貴重なる指針を與ふるものにし的並に研究方法に關して最も根本的なるものを説明するに努め とするも